

<p>福島大学附属図書館報</p> <p>書 燈</p>		<p>No.29</p> <p>2002. 10. 1 発行</p> <p>〒960-1293 福島市金谷川1番地 T E L (024) 548-8083 http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/</p> <p>福島大学附属図書館</p>
------------------------------	--	---

「 研 究 の 現 場 」

森 良 次

私は、大学で「比較経済史」という科目を担当し、ドイツ経済史の研究をしている関係で、一年か二年に一度ヨーロッパ、特にドイツを訪れます。別に物見遊山をするためではありません。目的は、現地の図書館・文書館での史料の調査と収集です。外国研究に携わる者全てが定期的に外国にでかけるわけがありませんし、日本にいても研究は続けられます。書名がわかっているれば、洋書は取り寄せられますし、絶版になった書籍や非売品の資料も、図書館などを通じて入手が可能です。書籍情報の電子データ化が進んだ最近では、どこの国のどこの図書館にどんな本が所蔵されているのか調べることも容易になりました。フィールド・ワークを別にすれば、日本にいても研究することはたくさんあるわけです。

ですが、資料へのアクセスが容易になり、学問的分業が進んだ今日、逆に、実証水準の向上を図るべく、現地の図書館などに赴いて、資料の調査・収集活動を行うことが、研究上必須となってきています。

19世紀ドイツのヴェルテンベルクという地域の研究をしている私の場合、まず対象としている地域の州立図書館にでかけ、予め必要とわかっている文献を借り出す他に、もはや主要ではなくなったカード式の図書目録で、研究テーマに関わる史料を捜します。コンピュータを使って、蔵書検索ができるといっても、電子データ化されているのは、比較的出版年の新しいものになお限られており、研究対象時期とする19世紀に著された文献や各種報告書等については、まだまだ現地図書館のカード式図書目録でなければ、所蔵が確認できないものが多くあります。書名だけでは判断できない史料の内容についても、現地の図書館であれば実物をみて確認できますので、日本にいては到底知り得ない貴重な史料を発見することもしばしばです。

こうして見つけた史料を大量にコピーして、

それらの渉猟がある程度すすむと、次ぎに訪れるのは文書館です。基本的に印刷物ではない、書簡、会議の議事録、非公式の報告書、企業の帳簿といった古・公文書を整理・保管する施設で、ドイツではアルヒーフArchivと呼ばれています。このアルヒーフで専門家の助言を受けながら、実証課題に関わる文書を見つけだします。例えば、当時の王国政府の産業政策の背後にどのような産業利害が存在したのか、という問題を解明するために、産業局局長の書簡、産業家向け講演の記録、議事録等にあたり、膨大な史料の中から課題に関係すると考えられる文書を探し出す、といった具合にです。19世紀に書かれた文書は基本的に手書で、読解はドイツ語を母語としない者には難しく、大変な時間を要する作業です。ここでしばしば助けとなってくれるのが、アーキビスト達（史料整理・保管の専門家）で、彼らと日に一度は雑談をするなどして如何に仲良くしておくか、研究内容と実証課題をどれだけ正確に理解してもらうのかということが、目的の史料に辿りつくことができるかどうか大きく影響します。

論文を書くための材料は、およそこのようにして手に入れるのです。日本にいながら世界中の図書館の蔵書検索ができる今日、私のような情報収集のやり方は地味で古くさいと思われるかもしれませんが、それが研究活動の現場の姿です。

以上のことは、これから卒業論文を執筆しようという皆さんにも当てはまると思います。OPACやNACSISは確かに便利で、有益な情報検索手段ではありますが、そこで得られる文献情報は研究のきっかけを与えてくれるもので、論文をまとめるうえで本当に意味のある文献やデータは、指導教官など専門家の助けを借り、文献と格闘する中からしか得られません。皆さんの卒業研究が充実したものとなることを祈っています。（経済学部助教授）

「北都の55日」——英国での図書館体験——

菊池 壮蔵（経済学部教授）

ふと昔に見た『北京の55日』という映画のシーンがその主題歌とともに脳裏をよぎる。時は1900年。歴史上の「義和団事件」（北清事変）を題材とした作品である。欧米列強に並ぶことに血道を上げてきた明治ニッポンは、この時期、清朝中国へ襲いかかる狼の群れの一員だったのである（ほどなく仲間割れが始まるのだが）。その翌年、夏目漱石は最初の文部省派遣留学でロンドンに到着、ヴィクトリア女王の葬儀に出会うことになる。日英同盟が締結されるのは1902年のことである。それからほぼ百年後、私はロンドンにいた。考えてみれば漱石は、今の私の年齢までは生きなかった。が、現地での彼の心情はしばしば私の胸をよぎった。

約55日間の英国滞在は、年来の準備や計画に基づいたものでなく、慌ただしく決まったものだった。年度内の帰国を条件として3ヶ月を越えなければ先方からの招請書類不要との規定により、また、1月25日に附属図書館大塚久雄文庫の開設式の準備を行うというスケジュール上の都合から、結局、直後の1月29日に取るものもとりあえず出発し、卒業式前には帰国するという日程になった。

この期におよんで…、という意識もなくはなかったが、現場でしか得られないもの、つまり皮膚感覚・空気・距離感等を体感するほかはないと思った。大抵のものは、インターネットで入手可能になっているから、帰国後でも可能なものは意識的にはずすつもりの旅行だった。ここでは、英国内の図書館での二三の体験について書いてみたいと思う。

[ロンドン]

ロンドン大英博物館の閲覧ホール[写真1]。現在、大英博物館の図書館機能は大英図書館と分離されているが、博物館中庭に往時のまま復元された（中心部に電子百科サービスが整備されてはいるが）。政治難民だったマルクスもこの場に通って経済学を勉強したのである。木製の椅子に尻のあとがつくほど通いつめたという伝説もあるが、そういうデザインの椅子だったということを見つけ、微笑する。

この博物館の収蔵品目の膨大さとその整理にかけた人手と時間を想うと眩暈を催す。畏怖を感じたのは建造物の壮大さではなく、かく利用されることを考え、莫大な資金と技術とを駆使してこのような建

造物を構築したその「思想」にたいしてであった。

帰国直後、TVで漱石の孫の房之介氏がここを訪れた番組を偶然に見た。ドームの下に立った彼も、息をのみ、私と同じ感想をもらしたのだった。こういう発想と努力をいとわない文化がいまの日本にあるだろうか、と思う。



写真1

[エディンバラ]

エディンバラは古都である。なにしろ、ニュータウンという名の区域が18世紀末の建設開始なのだ。町の古書店には「学生二割引」の文字も見える。学術都市の伝統も息づいている。

この地には大きなものとしては、エディンバラ大学図書館と国立図書館および市立図書館、さらにナショナル・アーカイブ・センターが存在する。最後のものは、元のScottish Record Officeが編成替えされて組織された。最近ではデータがネットワーク対応に整備され、どのような古文書がどこにあるかが即座に把握できる。わが国での、この種の[公]図書館の重要性やその整備に対する社会的意識とは相当の差がある。ここで、J.アンダソン(1739-1808)という人物の資料がスコットランド国立図書館とアバディーン大学にあることを確認する。そのレファレンス・ルームで、カードをめくりながら、ふと見回すと、その部屋の参考図書は本学では「貴重書」に入っている部類も多く、それらがいかにもあって当然のようにさりげなく並んでいた。

[アバディーン]

スコットランドの北東、北海に面したアバディーンは美しい花崗岩の都である。北海油田の基地として経済的には豊かな印象を受ける。アバディーン大学(King's Collage)[写真2]はすでに明治38年の秋

に創立400周年祝賀行事をやっている（辻村伊助『ハイランド』平凡社ライブラリー、にこのことが記載されていることを後に知った）。市内中心部の公共図書館も充実しており、係にScots Magazineの1809年刊行分を見たいのだがと説明すると、その辺の椅子に座って待っててください、という。ものの5分とたたないうちに、件のレイディは、「はい、これですよ。」といった感じで無造作に手渡してくれた。コピーカードを購入すれば、20円/@ほどでセルフサービスコピーも可能だった。高校生や老婦人が隣で勉強している公共図書館で、200年ほど前の雑誌が、「ひょい」とでてきて閲覧できるというのは、羨望の極みというほかはない。

大学(King's Collage)図書館の利用も、飛び込みだったが、いずれも実に親切な対応だった。特別史料館では、入り口のコインロッカーに荷物とコートを預けて、利用者名簿に必要事項を書き入れて利用する。エディンバラで確認してきたモノを調べてもらう。でてきたのは、細紐で十文字に結ばれたA3二つ折りの厚紙に挟まれていた。閲覧専用の厚いスポンジの下敷の上で紐を解くと、それらはいずれも筆跡や大きさもさまざまな、おそらくは羽根ペンで書かれたであろう手書きの紙束であった。一瞬絶句する。「おいおい、こんなモノ読めるのかよ。出直した方がいいんじゃないか？」と内心つぶやく。深呼吸して、文字列をにらむ。大学院生時代に「手書ドイツ語亀甲文字の筆記体」の判読を試みた記憶がよみがえる。なんとか読めるものもありそうだ。1740年代からの地代の領収書がある。領主の婆さんのモノはスペルも文法もいいかげんで読みづらい。次の世代の旦那は高等教育を受けた様子もみえ、しっかりしたものである。婚姻契約書も出てきた。これは透かし入りの紙で、印紙も張られている、正規な手続きに従った法的文書なので、貴婦人の手紙などよりはるかに判読が容易であった。夫婦それぞれ用に二部あり、同一内容ながら各々別人の筆跡だったので比較しながら読めたのは幸いであった。が、実に興味深いその内容の紹介は別にゆずる他ない。

もうひとつ見ておきたかった1808年の雑誌の所在

は、聖母図書館にあることがわかったが、旅行日程の都合上、その時点では立ち寄りなかった。インバネスに移動してからも、どうしても気になり、再び列車でアバディーンに日帰りの旅を試みる。石畳の通りを歩いて訪れた聖母図書館は、学生で込み合っていた。エントランス・ホールでは、廃棄処分図書の販売コーナーがあって驚く。カウンターで目的の雑誌の確認をしたところ、コンピュータで検索して、地下の書庫のどこそこの区画にあるという。たまたましていると、そこの階段を降りて移動書架の奥の側の左から何番目だという。行けばわかるはずと言われ、いわれたとおり自分で地下の書庫にもぐる。なんて開放的なんだ。感動する。18,19世紀以来の雑誌類の現物が整然と並んでいるその書架の間を歩いて目的の巻に辿り着く。見れば書庫の端にあるいくつかのキャレルの脇にカード式のコピー機もおいてある。現物を手にカウンターに戻る。親切にも、当該ページのコピーを頂けたのである。

研究・調査活動に対するバリアフリー環境とはこういうものなのかと、あらためて「身の震えるような体感」を覚えたのであった。だが、このような環境は一朝一夕によく整備されうるものではないだろう。羨むだけではいけない。

ロンドンのホテルで見た子供向けのTV番組に、「大人の仕事・ガーデナー」(庭師)体験というのがあった。オーバーオール姿の5,6才の子供が芝張り仕事を済ませ、張ったばかりの芝をペタペタたたきながら、最後に満足そうにこう言ったのだ。「これで、百年も手入れすれば、見事な芝生になるというもんだ。」



写真2

【図書館からのお知らせ】

学生のみなさんへ……………視聴覚室でDVDを楽しもう！！

視聴覚室にDVDプレーヤーを設置しました。グループでご利用ください。

大学院生のみなさんへ……………パソコンが新しく利用できるようになりました。

研究用閲覧室(2台)と研究用雑誌室(1台)にパソコンを設置しました。

利用したい場合はカウンターへ申し込んで下さい。

思い出の一冊 『カラー図説 大日本歳時記(全5巻)』 講談社 1981

永幡 幸司 (行政社会学部助教授)

風流のはじめや奥の田植うた 芭蕉
田植機が奏でる無骨な田植唄 芳賀公男

これらの俳句は、それぞれ江戸時代と平成に詠まれた田植えの情景の句です。これらを比較することで、田植えの音風景が「田植うた」が聞えてくるような「風流」なものから、「田植機」の「無骨」な音が響き渡るようなものになってしまったことを読み解けます。このように、日本の音風景がどのような時代変遷をしたのかについて、俳句の世界から読み取ろう——ただし、統計的に——というのが、私の卒業研究のテーマでした。

この「統計的に」という条件が曲者で、これを満たすためには、ある程度の数の俳句を統計処理しやすい形に整理したデータベースが必要でした。そこで私が最初に取り組んだ作業は、新聞の投稿俳句欄に掲載された音についての記述のある俳句のデータベース作りでした。その際お世話になったのが『日本大歳時記』です。音についての記述のある句がいくつかの季節に詠まれたのかを季語から割り出すために、季語の索引として利用していました。

この歳時記は、総索引には各季語の季節が春夏秋冬でしか書いてないので、より詳しい時期を知るに

は本文を見るしかないという「欠点」がありました。なぜ「欠点」かということ、本文を開くとついつい解説を読み、例句を読み、時には次の季語まで…というように、作業が捗らない原因をずいぶん提供してくれたからです。おかげで、データベースができあがる頃には、季語や季節についての知識がそれなりについた上、俳句の世界がとても好きになっていました。

私が専門としている「サウンドスケープ」というのは、音環境を単なる物理的な世界として捉えるのではなく、それを人々がどのように意味付けているのかという点まで含めて捉えようという考え方です。このような立場で研究を進めていくには、音に関する物理的な知識だけではなく、文化についての知識も要求されます。私が歳時記を読み進めるという横道作業の中で得たものは、まさに、俳句という文化の中に現れた、日本の音文化についての知識であったと思います。そして、この知識によってこそ、なんとか卒論を仕上げる事ができたのではないかと思います。

学生時代にお世話になったこの一冊、今でも私の研究室の本棚に鎮座し、相も変わらず、研究の邪魔をしてくれています。(請求記号386/ka64k)

電子ジャーナル“元年”

学術情報係

本館における電子ジャーナルの利用は、平成12年度に始めたElsevier Science社のScience Direct Web editionが最初になります。その後、国立情報学研究所が提供するOUP(Oxford University Press)電子ジャーナルの試験利用に参加し、どちらも現在まで継続利用されています。これらは冊子体雑誌を購読していることによる付加サービス、あるいは今後の本格導入のための試験的な利用であって、いずれの場合も経費の負担がなく、また利用できるタイトル数も限られており、“電子ジャーナルを導入している”とはまだいえない状況でした。

今回、契約した下記4種の電子ジャーナルは初めて有料のもので、利用できるタイトル数は従来のものと合わせると約1,500誌以上になります。

【導入電子ジャーナル名】

- ・Blackwell Publishers (SSH コレクション) 約260誌
- ・Blackwell Science (STM コレクション) 約420誌
- ・Springer-Verlag LINK 約500誌

・Wiley InterScience 約300誌

必要な雑誌が充分そろっているとはいえ、また課題もあるにせよ、とりあえず本館における電子ジャーナル“元年”と呼んでいいかもしれません。

当係では、今回の導入にあたり、7月末に教官、大学院生を主な対象者として利用法についての講座を開催しました。夏休みに入った時期にもかかわらず、多くの参加者が熱心に耳を傾けていました。この講座は今後も継続して開催する予定です。

現在、出版界における雑誌の電子ジャーナル化は外国雑誌が中心ですが、日本においても学会などの専門誌を中心に電子化が進みつつあります。“スピーディー”“時間、場所を問わない”“検索もできる”“電子ジャーナル”が冊子体雑誌に取って代わる日も遠くありません。しかし、予算の問題、アーカイブ機能の問題など解決すべき課題もあります。“元年”の今年、今後の充実に向け本格的に検討する年でもあります。

探せてますか？
知りたい情報

「情報探索基礎講座」

学術情報係

最近では、学術情報を入手する手段として、データベースやインターネットが大きな役割を占めるようになりました。図書館でも学生の皆さんがコンピューターを駆使している姿を良く見かけます。しかし「ぴったり当てはまるものが出てこない」「難しそう」といった声も耳にします。そこで、図書館では

- ① 初心者でも気軽に使ってもらおう
- ② 探している情報にふさわしい検索方法を知ってもらおう

ということで、5月～7月にかけて『情報探索基礎講座』を開催しました。

講座は下の4種類のコースを企画し、各コース1時間30分としてそれぞれ2～3回開催しました。講座の進め方は、パワーポイントや操作画面を使っでの説明および実習で、参加者からはパソコンを熱心に使いながらも活発に質問がだされるなどしました。

参加人数は合計で、のべ73名となり、1年生から大学院生まで、学年も学部も幅広い層からの参加が得られました。電子ジャーナルにおいては、資料の性格上大学院生と教官が中心となりました。

今後の参考のために、アンケートに答えてもらいました。各コースともほぼ全員が「参考になった」との回答があり、講座が有益であったことを知ることが出来ました。感想などを自由に書いてもらった

ところ、「レポートや論文を書く際に活用したい」「情報検索についてきちんとした知識を身につけてこなかったので勉強になった」「またこのような講座に参加したい」といった感想が寄せられ、なかには「自由参加で参加者が少ないのがもったいない」といった声もありました。

今後の課題としては、

- ① 基礎から応用までの情報探索技術をいかに参加者のレベルに合わせて指導していくか
- ② 夜間生の学生も参加できるような時間の設定
- ③ より多くの学生にいかに参加してもらうか

以上の三点があげられます。

これらへの対応として、様々な内容のコースを企画し定期的に開催する、夕刻からの開催を検討するなどが考えられます。また、より多くの学生に情報探索技術を身につけてもらうためには、図書館からの働きかけばかりでなく、授業やゼミの活用を視野にいたれた教官との連携を図ることも考えられます。

それぞれの講座内容、説明画面および配布資料は図書館ホームページの「情報探索基礎講座」のページより見る事が出来ます。また、今後も定期的に『情報探索基礎講座』を企画し、これまで寄せられた要望にも応えていきたいと考えておりますので、より多くの方に参加していただきたいと思ひます。

○ 図書館資料の探し方

(2回 17名参加)

本学図書館で所蔵している図書・雑誌の蔵書検索(OPAC)の基本的な利用から、内容(主題)検索・履歴検索など便利な検索方法について、参加者にも例題を使って実際に検索してもらいながら、説明しました。また全国大学図書館の蔵書検索や国立国会図書館の説明も行いました。

○ 雑誌論文・新聞記事の探し方

(3回 28名参加)

雑誌に掲載されている論文の目次情報や新聞記事を探す方法として、本館で利用できる「雑誌記事索引CD-ROM」や「CD-HIASK 朝日新聞記事データベース」等を利用した文献調査法を紹介し、参加者にも例題を使って実際に検索してもらいました。

○ インターネット情報の探し方

(2回 13名参加)

インターネット上の情報の活用も重要です。附属図書館ホームページのリンク集を紹介しながら、いかに信頼性のある情報を効率良く見つけるかといったネット上の学術情報の活用についてアドバイスしました。

○ 電子ジャーナルの使い方

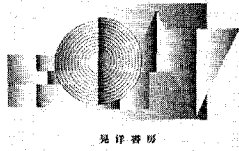
(2回 15名参加)

最近では雑誌論文のタイトル情報だけではなく“本文そのものを電子情報として提供している雑誌”＝“電子ジャーナル”が盛んに利用されてきています。本学でも外国雑誌約150誌の電子ジャーナルが利用できるようになりました。これらの紹介と利用方法について説明し、参加者にも実際に使ってもらいました。

学内教官著作寄贈図書を紹介

人間理解の基礎

中学生の哲学
内田 詔夫 著



『人間理解の基礎』
晃洋書房 2002.4
内田 詔夫著
(教育学部教授)

この本は、中学校で行った授業をもとに、中学生が学んだり日常的に接する程度の知識や情報と簡単な思考のみをもとにして、「人間と世界」、「知識」、「行為」という3つの視点から、人間の独自性、科学は確実か、自由と責任、可能性と限界、法則とルールなど、哲学の基本問題を徹底的にやさしく、またわかりやすく論じ、読者自身の

考察のきっかけないし手がかりを提供しようとした試みです。哲学というと、普通の現代人の生活とは無縁の特殊な問題を、特定の信念や理論に基づいて、特別な問題意識や悩みを持つ人のために、また難解な理論やことばを駆使して論じるもの、というようなイメージを持ち、生活や職業上の必要性や有効性があるとは思えない人が多いように思われますが、この本は、日常の学習や生活に即して人間理解を深めることをねらいとしている点で、いわば「普通の人間の、普通の人間による、普通の人間のための哲学」を追求した試みでもあります。
(請求記号104/U14n)

その感覚が誤りだとは言えないが、状況のごく一部に過ぎないことも事実である。

その感覚が誤りだとは言えないが、状況のごく一部に過ぎないことも事実である。



『大型店とドイツのまちづくり-中心市街地活性化と広域調整-』
学芸出版社 2001.12
阿部 成治著(教育学部教授)

「百聞は一見に如かず」とは目で見ることの重要性を述べたものだが、毎日のように多数のジャンボ機が飛び、簡単に海外を訪問できる

現在でも、異国の理解は容易でない。ドイツの中心市街地が歩行者空間として整備され、人々であふれている光景を見ると、「このように整備をすれば、日本でも市街地を活性化できる」と感じるだろう。

この本は、都心を衰退からまもるために、ドイツで何が行われているのかを追跡したもので、個人の動きにまで光をあてた点に特徴がある。何回ドイツを訪問しても、郊外店舗の進出をめぐる市議会で行われている議論や、裁判紛争は見えてこない。そこで、新聞社がホームページに掲載しているローカルニュース等を調査し、現地を訪問して書いたのがこの本である。大切なのは、百聞と一見を組み合わせることではないだろうか。
(請求記号518.8/A12o)

その感覚が誤りだとは言えないが、状況のごく一部に過ぎないことも事実である。

赤い服の少女

紅衣少女
鉄凝 著 池沢 実芳 訳



『赤い服の少女』
近代文芸社 2002.6
鉄凝著 池沢 実芳訳
(経済学部教授)

本書は、鉄凝の最初の邦訳作品集『第八曜日を下さい』(95年8月、近代文芸社)に続く2冊目の邦訳作品集である。書名にした中篇「赤い服の少女」(映画

「紅い服の少女」の原作。福大にもこの映画のビデオがある)を含む6篇の中短篇小説を収録。

ある人から、懐かしい中国の80年代初の息吹が感じられる作品集という感想を貰った。『大浴女』や

「午後懸崖」など最近の彼女の円熟した作品からみれば、技巧的に相当に幼稚な作品が収められていると見る向きもあるだろうが、これらの初期作品にも彼女の誠実で真摯な筆づかいが認められる点で、訳者は本書にも捨て難い魅力を感じている。著者は文革体験者である。80年代初、中国社会には文革直後の喧騒と安堵と希望が渦巻いていた。80年代初の息吹とは、再生を目指す悲慘な文革体験者たちのそのような渦巻く空気を指すのではないかと思う。読者は、本書の作品から当時の空気を感じ取ってほしい。

(請求記号923/Te86a)



『律令国家とふくしま』

歴史春秋社 2001.9

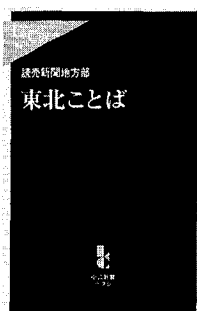
工藤 雅樹著 (行政社会学部教授)

これまで白河関以北は古代にあっては蝦夷の世界であると考えられていた。しかし少なくとも大化の改新直前のころ以後の福島県中通地方、浜通り地方(厳密に言えば阿武隈川河口以南)は、蝦夷の世界ではなかった。また会津地方は必ずしも中通地方、浜通り地方と同じ性格の地域ではなく、むしろ仙

台平野と共通する側面がある。ひとくちに東北地方の古代史や古代文化といっても決して画一的なものではない。古代史や考古学の面からいえば、福島県地方は東北地方的な要素とともに東日本諸地域と共通する要素も少なくないのである。

本書は、近年の考古学の調査成果をふまえながら、日本古代史一般や蝦夷の世界の古代史との関係にも配慮しながら、全面的に蝦夷の世界とはいえないものの、蝦夷の世界と無縁でもない、東北地方南部の古代史について、簡潔にまとめてみたものである。(請求記号090.8/R84r/51)

「世界共通語」化とまったく同じものだ。人々が躍起になって英語を勉強している陰で、各地の少数民族の言語が圧迫され、消滅に追いやられている。東南アジアでは若者が英語しか話せないために、お年寄りの話す言葉が理解できないという状況も生まれているという。まるで現在の東北地方のようではないか。



『東北ことば』読売新聞地方部著 2002.4 (中公ラクレ44)

半沢 康 (教育学部助教授)

近代日本の成立以降、「標準語(戦後は共通語)」という特権的な名称が「東京の方言」に与えられた。「東京の方言」を理解し、話すことが出来ない

と進学も就職も出来ず、裁判だって受けられない。日本各地の人々はやむなく自分達の言葉を捨て「東京方言」を習得した。関西の人は堂々と方言を使っているじゃないか、という反論もあるが関西弁だって相当に「東京方言化」されているのである。

この構図、実は今世界中で進行している「英語」の

「方言」の問題は、常に優勢言語話者による他言語話者の支配と抑圧、言語差から生まれる社会的不平等の増大といった政治的な問題を内に孕んでいる。「素材で温かみのある言葉」「心やすらぐ故郷の言葉」という安易な方言イメージ(本書のスタンスも結構そうだったりする。新聞連載の限界。)の背後に目を向けていかないと、「日本語」だってそのうち衰退の道をたどることになるかもしれない。(請求記号818.2/Y81t)

金融、教育、医療、福祉にいたるまで市場原理の名のもとに弱者、敗者が切り捨てられつつあります。

「ふくしま地域づくりの会」は、各階層の人自主的な活動組織ですが、10周年記念事業の一つとして本書をとりまとめました。①中小企業、地場産業、②農山村・農業、③商業・観光業、④ベンチャー・IT、⑤産業基盤・政策の5つの分野に分け、19名の執筆者による共同作業です。本学の先生、院生等多く加わっています。意欲的な企業、地域産業、新たに登場しているシステムなど「挑戦」という面からとりあげています。(請求記号096/F84c)



『地域産業の挑戦』

ふくしま地域づくりの会編

八朔社 2002.6

(10周年シリーズ①)

下平尾 勲 (経済学部教授)

地域は今、次のような要因によって急激に変化しています。1つは長びく不況の深刻化、

2つはグローバル化の推進、3つは規制改革・構造改革です。老舗の企業の倒産、誘致企業の撤退、市街地商業の空洞化、地域農業の解体、輸入品の急増による地場産業の衰退だけではありません。産業、

金融、教育、医療、福祉にいたるまで市場原理の名のもとに弱者、敗者が切り捨てられつつあります。

「ふくしま地域づくりの会」は、各階層の人自主的な活動組織ですが、10周年記念事業の一つとして本書をとりまとめました。①中小企業、地場産業、②農山村・農業、③商業・観光業、④ベンチャー・IT、⑤産業基盤・政策の5つの分野に分け、19名の執筆者による共同作業です。本学の先生、院生等多く加わっています。意欲的な企業、地域産業、新たに登場しているシステムなど「挑戦」という面からとりあげています。(請求記号096/F84c)

(請求記号096/F84c)

その他の学内教官著作寄贈図書リスト

書名	出版社	出版年	著者	請求番号	所在
読んで学べるADHDのペアレントトレーニング	明石書店	2002.3	アッシア・ウィットナム著 中田洋二郎訳	378/C99y	学内刊行物コーナー
材料の科学と工学(全4巻)	培風館	2002.6	W.D.キャリスター著 入野 修監訳	501.4/C13Z/1~4	学内刊行物コーナー
言語文学教育 佐藤宣男教授退官記念論文集	佐藤宣男教授退官記念論文集刊行会	2002.2	佐藤宣男教授退官記念論文集刊行会編	375.8/Sa85g	学内刊行物コーナー
名古屋-伊勢間グロットグラム集	徳島大学総合科学部	2001.5	岸江信介代表 半沢康等編著	818.55/Ki56n	学内刊行物コーナー

「物理化学・・・?」

図書館のカウンターでバイトを始めてはや1年半の月日がながれたが、今でも頭がフリーズ（私が日本中世史を研究しているのであり、物理とか化学とか、ましてや「物理化学」という学問とはかなり縁遠い世界で日々の生活をすごしているからだ）してしまう閉架図書の閲覧依頼が間々ある。しかし、そういう時こそ私は胸躍るものを感じながら閉架図書へと急ぐのである。

私はつね日ごろより図書館をバイト先とも、研究のホームグラウンドともしている。だから、図書館のことは一般学生よりは熟知していると自負している。言うなれば、図書館は私にとっては「庭」のようなものであり、本はその庭に植えられている「植物」だと例えることができるだろう。

しかし、時には自分とは縁遠い思いもよらない分野の本の検索や、閉架図書の閲覧を依頼される場合がある。それは、「庭」にあるいつもは雑草だと思っている植物をあらためて観察するというものであり、その本を見つけたときの喜びは新種の植物を自分の庭で発見するのに（実際に自宅の庭で新種の植物を見つけたことはない）、その気持ちが妥当で

あるか疑問ではあるが) 似ていると思うが、どうであろうか。

図書館を利用する一般学生のみなさんも自分が興味ある学問分野の見識をもっと深めたいという欲求をもって入学されたと思う。だが、みなさんにとって不慣れな図書館はまだまだ「庭」のような存在ではなく、いわば「ジャングル」のようなものであろう。どこに何があるかわからないし、どうやって採集した植物を持ち出していいのかもわからないからだ。しかし、みなさんには心強い道具や案内人（図書検索のためのパソコンや図書館の職員の方々）がいる。その助けを借りながら、自分にとっての新種の植物を手に入れて自分の学問の探求に活かしてみてもどうであろうか。

自分に必要なものを未知の世界から自分の力で手に入れる。その時の喜びは何ものにも替えがたいものがあるはずだと私は思う。そして、それは単に本を手に入れるということにととまらず、学問の世界でも同じであると私は思うが、みなさんはどうであろうか。



【購入資料案内】

国立公文書館所蔵

日本近代史研究史料コレクション「公文別録」篇

(全124リール+別冊4)

総務係

「公文別録」は、本来「公文録」「太政類典」に収録されるべき内閣で扱った公文書が、その機密性ゆえ別に綴じられたものであり、明治初期から太平洋戦争期におよぶ期間の内政・外交のあらゆる諸問題・諸事件に関する文書群である。日本近代史研究における重要性は、質・量ともに大変重い文書群であり、それぞれ各研究テーマに対し多く見るべき史料を含んでいる。

この史料は1978年から公開されていたが、そのすべてが公開されたのは、2000年10月である。したがって、この史料についての本格的な研究は端緒についたばかりといってよい。日本近代史を研究するものにとって必須の基礎資料のひとつであり、学内共同利用図書として多くの研究者に利用していただきたい。

(請求記号MF/ko49k/X)

目次

- ・ 研究の現場…………… 森良次 (1)
- ・ 「北都の55日」…………… 菊池壮蔵 (2)
- ・ 図書館からのお知らせ…………… 情報サービス係 (3)
- ・ 思い出の一冊…………… 永幡幸司 (4)
- ・ 電子ジャーナル“元年”…………… 学術情報係 (4)
- ・ 『情報探索基礎講座』…………… 学術情報係 (5)
- ・ 学内教官著作寄贈図書の紹介
 - 「人間理解の基礎」…………… 内田詔夫 (6)
 - 「大型店とドイツのまちづくり」…………… 阿部成治 (6)
 - 「赤い服の少女」…………… 池沢実芳 (6)
 - 「律令国家とふくしま」…………… 工藤雅樹 (7)
 - 「東北ことば」…………… 半沢康 (7)
 - 「地域産業の挑戦」…………… 下平尾勲 (7)
 - ・ 図書館ジャングル-カウンターの内側から- …… 山岸崇 (8)
 - ・ 日本近代史研究史料コレクション
 - 「公文別録」篇…………… 総務係 (8)